

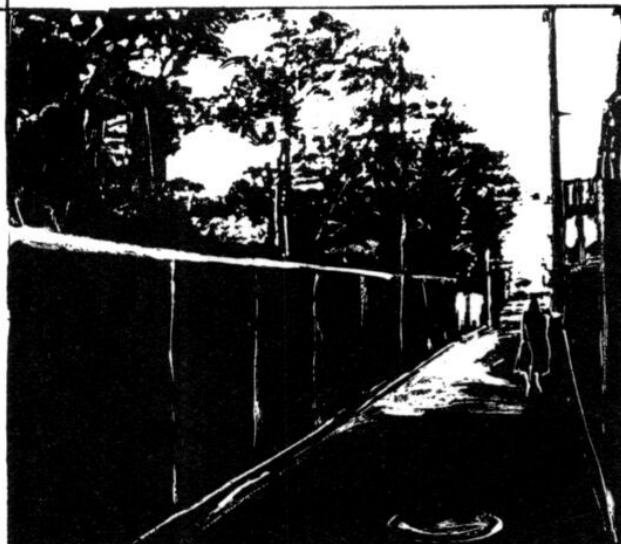
夜想夢

作・画／西崎まりの



今でも時折あの夢のような出来事を
想い出す夜がある。

普段それは深い森に囲まれた底無し沼のように
記憶の中に沈んでいた。



訪れた洋館はひっそりと静まり、
冷えきった身体を凍らせるような沈黙が
辺りを支配している。





一瞬、少女と思しき人影が窓から顔を覗かせた。



それが、珠里との最初の出会いだった。
思えばあの時引き返すべきだったのかもしれない。



生気のない青さめた色と冷やかな微笑。



実直そうな執事の案内に従って歩を進めると
ハイヒールの足音が響く。
豪華な大理石の廊下を通り抜けると
広間の隅で男が待っていた。

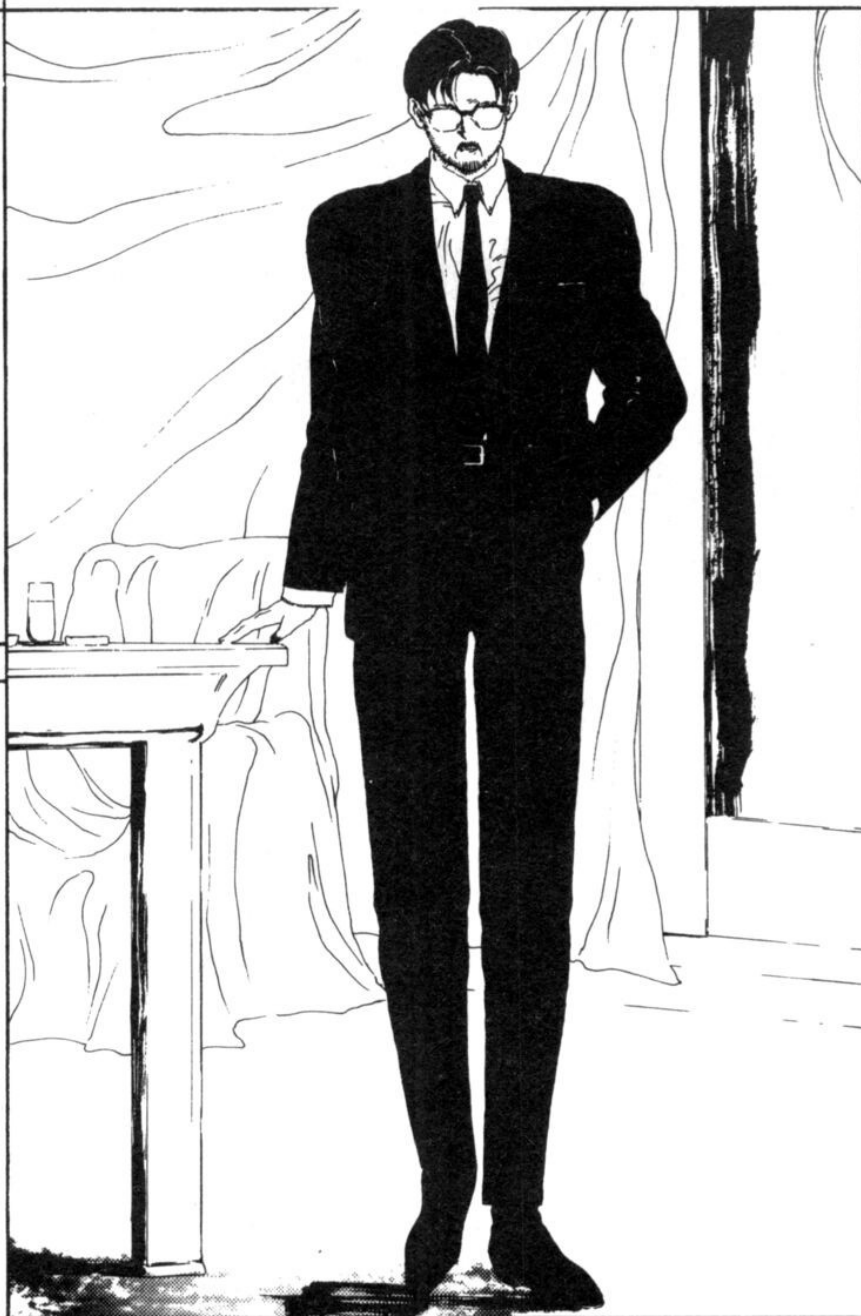


「マダムQからの依頼で来た方ですね。
旦那様は奥の間でお待ちです。」



「どうぞ」と言う声に導かれ
都市の郊外から更に外れたその古い洋館に
一歩足を踏み入れると、
消毒剤の強い匂いが鼻についた。

男は財前といい、かつて天才的な脳外科医として世に知られていた。
ある折に不祥事を起こし
医師会から追放されたと聞く。
以前よりマダムの店によく出入りしており
私の上客の一人だった。



彼の趣味も変わっていた。
マダムの店に来る客は概ね、他人には
言えないような類の行為を要求してくる、
いわゆる変質者と呼ばれる客が多い。
勿論それなりの代価を支払ってもらう。
しかし財前の要求は極めて単純であり、
嫌な思いをさせられることもなく
むしろ好ましくさえあった。



上客というのにも理由がある。

財前は私に様々な衣装を着せてそれを写真に撮り、ただそれだけの行為を繰り返して帰っていく。そういう男だった。



「もう察しているとは思いますが、今日わざわざ君を呼んだのは是非とも君の相手をしたいという人がいてね、君の写真を見せたいとお気に入りのよう、マダムには事情を話してあるがしばらく君の身柄を預かることにしたよ、どれ位の期間になるかはまだ判らないが、当然それなりの礼はさせてもらう。」

「え、ええ、そういうことなら

それで結構ですわ。」

心の中でわだかまっていた不安が的中した。

わざわざ自宅に招くというからには

財前の相手ではあるまいとは予想はしていたが、

期限さえ切つてないとは……

それではこの家に監禁されたも同然である。

気が付くと先刻の少女が無造作に髪を束ねて
財前のかたわらに立っていた。

ああ、じゃあ早速紹介しよう。
娘の珠里だ――

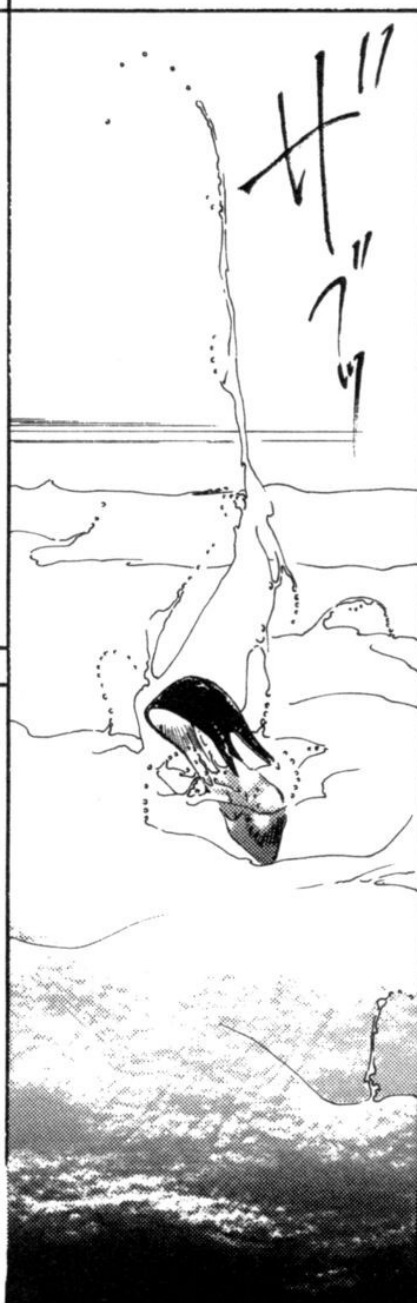
そして君の客でもある



夜半を過ぎて雨が降り始めたようだった――

写真でみるより
やっぱり実物ね

ミニとハイヒールが
よく似合うわ





最悪の客だった。



さながら子供が捕まえた昆虫を虐めるようなものである。
しかし珠里という少女の肢体にも染み付いた
消毒液の匂いと腐臭、
そして瞳孔の奥深くに宿る邪悪な意志——
それは通常の性交では飽きたらなくなった
老人の欲望を連想させた。

そう私がOL嬢なら、この少女はステファン卿だ。
手慣れた嗜虐のテクニックから
想像したことだったが、
あながち的外れでもなかったと思う。





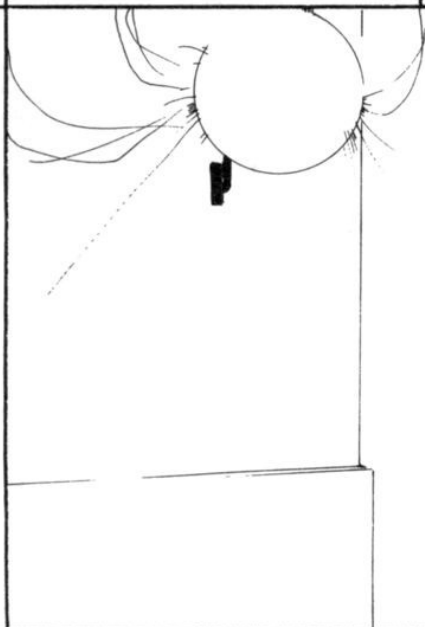
そのこと自体は驚くに当らない。
私を珠里の玩具として与えるような男である。



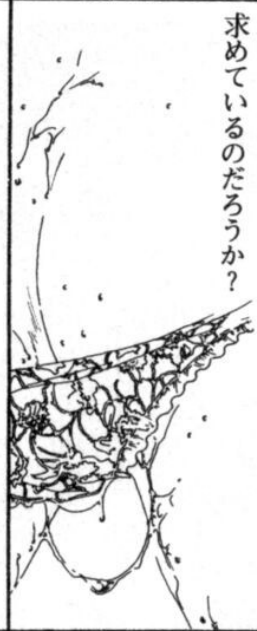
財前と珠里の陰惨な関係を知ったのは、
館に来て既に二週間が過ぎた頃である。



それは偶然私が覗き見た
ある情景からの連想でもあった。



驚くべきは、珠里に向かって「父さん」と娘に対して「父」と呼び掛けていたことだった。それは繰り返し繰り返し哀願を請う犬の姿に見えた。財前は娘の身体に父の面影を求めているのだろうか？



何かが不自然だった。
何もかもが不愉快だった。



そして破局は唐突に訪れた――



数日の間珠里の姿を見ないなど思っていると、突然訃報が届いた。行きずりの浮浪者たちに暴行を加えられた揚句、絞殺されたという。

私の身体を弄ぶのに飽きた時は、外でいかわしい男を漁って身を任せていたらしい。





翌日、財前もまた失踪する。



「いい加減にしておきなさいと言っておいたのだが……」



一通の書き置きだけが残されていた。



「娘へ——
どこで何が間違ったのか、
今となつてはよく判らない。
おまえには辛いことばかりさせてしまった。
何もできなかった私を許して欲しい。
だが確かにおまえは私が愛人に産ませた子供で
珠里の異母姉妹であり、そして同時に
珠里はお前の祖父にあたる。」

彼女は先天性の脳障害に犯されていた。
私の力ではどうすることもできなかった。
そして私の父の頑な主張によって、
あの忌まわしい無謀な手術が行われることになる。
珠里を助けるためでもなく、
ただ父の延命と私を追放した医師会を見返したい
がために人体実験のタブーを破ったのだ。
血縁の強さだろうか、幸い手術は成功した。
歪んだ欲望から生まれた怪物の誕生でもあった。



八十歳の頭脳と十四歳の肉体を持った怪物。
それが珠里の正体だ。



彼女、いや彼は次第に通常の性交に飽きたらなくなり
異形の交配を求めるようになっていく。



珠里は、父は、
快楽の追求にひたすら貪欲だった――



そしていつしかおまえの存在もその知るところとなり
おまえの肉体を欲しがった。
マダムの店に通う私の目的が密かに娘のおまえに
会うことだと知った時、怪物の快樂追求にもつとも
相応しい犠牲が見つかったと狂喜していたよ。

あれに言わせれば、男が女を求めるのは
女性への同一化を願うからであり、
女を隷属化しようとするのはその欲望の最たるものだという。
そして近親相姦こそ上流階級における特権的背徳だとも。
年齢による性的能力の劣化もなくなれば、
あとはただ淫獣と化すだけだった。
私もその虜となり、全て言いなりになるしかなかった。





その珠里が死んだ以上、私もここに留まる気はない。

全ての遺産は弁護士によるしかるべき処理に従っておまえが相続することになる。
せめてもの償いとして受け取って欲しい。」



これが財前の残した手紙の全文だった。
私はしばらく茫然としていた。

それからゆっくり落ちついて思考を整理した。
確かに私には父はいない。

マダム一人の手でずっと育てられてきた。
すると財前の愛人がマダムということになる。
それはまだいい。

珠里の脳細胞が祖父のものだと――

そんなことがあるのだろうか？

それよりは――

それよりは財前が珠里との近親相姦によって
生まれた罪悪感を父親という神、超自我の投影で
解消しようとしたと考える方が納得がいく。
おそらく――

珠里も財前に強制された性交に対する抑圧から、
同性愛と嗜虐趣味の偽装的な女神を
無意識に演じたのだろう。

手紙に書かれた珠里の言葉こそ、
財前自身の狂った独白ではなかったろうか？



私は莫大な資産目録をそのままマダムに渡した。
(多分その方がきつと良いだろうと思ったのだ。)
そして次の仕事を待った。



時折、汗に濡れたラバーの光沢と
湿って重い革の匂いに珠里を想い出す。
(彼女は本当に妹だったのだろうか?)



財前の行方は杳として知れない。



振りかえると館は
深い森に包まれた暗緑の沼のように
ひっそりと沈黙を守っていた――

